

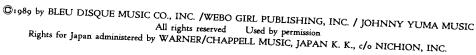
チェリッシュ

Words & Music by Madonna Ciccone and Patrick Leonard

軽快なシャッフル・ナンバー。囚のエレピ1はかなりオフ・バランスなうえに、柔らかめの音色なので聴き取りにくいのだが、このように3度和音を用いたフレーズとなっている。シンコペーションが多いのでリズム・キープには十分注意しよう。なお、ベースは他の多くの曲と同様、通常のエレキ・ベースでは出せない音域の音が多数登場する。タブ譜では便宜上1オクターブ上げて記しているが、コードのつながりが自然になるよう、各自工夫してみよう。 日からのドラムはハイハットを叩かず、左右のチャンネルに振ってあるスズのような音色で代用されている。バンドで演奏する場合にこのスズが入れられない時は、ハイハットでこの雰囲気をまねてみよう。また、ギターは単音のバッキング・パターン。この場合、なるベくアタッキーな音色が欲しいので、ベー

スのチョッパーのプルのように指でピッキングし、指板に弦を叩きつけるような感じでも良いだろう。この部分のストリングス系のシンセのバッキングは、いわゆる白玉バッキングだが、コードが変わっても共通する音を伸ばしている点に注意。オルガンのバッキングにしばしば見られる手法だ。旧はギター、ベースによるユニゾンがバッキングの肝。発音のタイミングだけでなく、消音のタイミングにも気を使おう。また、3、4、7、8小節目に見られるオクタープ奏法によるカッティングは余った指をフル活用してしつかりミュートするように。旧のコーラスの3連符の部分はリズムがモタらないように。口はコーラスが主役。この4小節間はドラムが休みなので、音程はもちろん、リズムにも十分注意したい。









Keyboard

Cuitar

2

Varel

-

_

9







Š

Keyboard

Guitar

Bass

Yocal

Other

Keyboard

Guitar

Bass





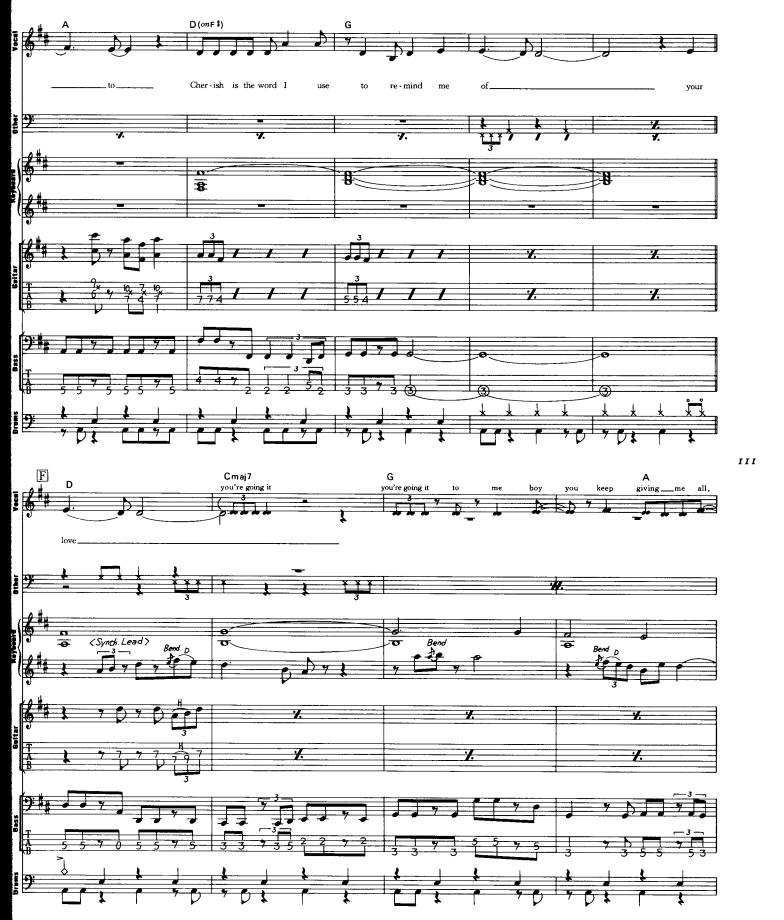


Procedure

•

.

į





.

.

loco.

, eq.

Keyboard

7

Bass

Drums





CRAZY FOR YOU

クレイジー・フォー・ユー

Words & Music by John Bettis and Jon Lind

ストリングスを始め、シンセ系をふんだんに使った重厚なサウンド。それに比べて、MADONNAのしっとりとした歌声が聴きものだ。ギターのイントロ8小節目に入っているのは、この曲唯一のディストーション・サウンド。オーバー・ダビングで重ねられたものだが、ギターが1本の時でも是非加えて欲しい。この部分だけエフェクターをかけて歪ませるか、キーボードに余裕があるならストリングスなどで同じメロディをプレイするのもいいだろう。囚からは、ナチュラルなクリアー・トーンのエレキ・ギター。ここでは、16 分音符遅れのディレイを掛け、音をダブらせた

感じになっている。ディレイ・タイムが長すぎると音がグチャケチャになってしまうので注意しよう。②からのコード・プレイは、6弦から1弦に向かってピックをずらしていくようなピッキングだ。細かいニュアンスは原曲をよく聴いて感じとって欲しい。また、ここではコーラスやディレイを掛け、音の広がりを出せればベター。シンセ・ベースによるプレイだが、エレキ・ベースで弾けるようタブ譜を付けたので、是非チャレンジして欲しい。コンプレッサーを使い、アタックを一定にすると似た感じが得られるだろう。





©1983, 1985 by WB MUSIC CORP. /WARNER-TAMERLANE PUBLISHING CORP.

All rights reserved Used by permission

Rights for Japan administered by WARNER/CHAPPELL MUSIC, JAPAN K. K., c/o NICHION, INC.

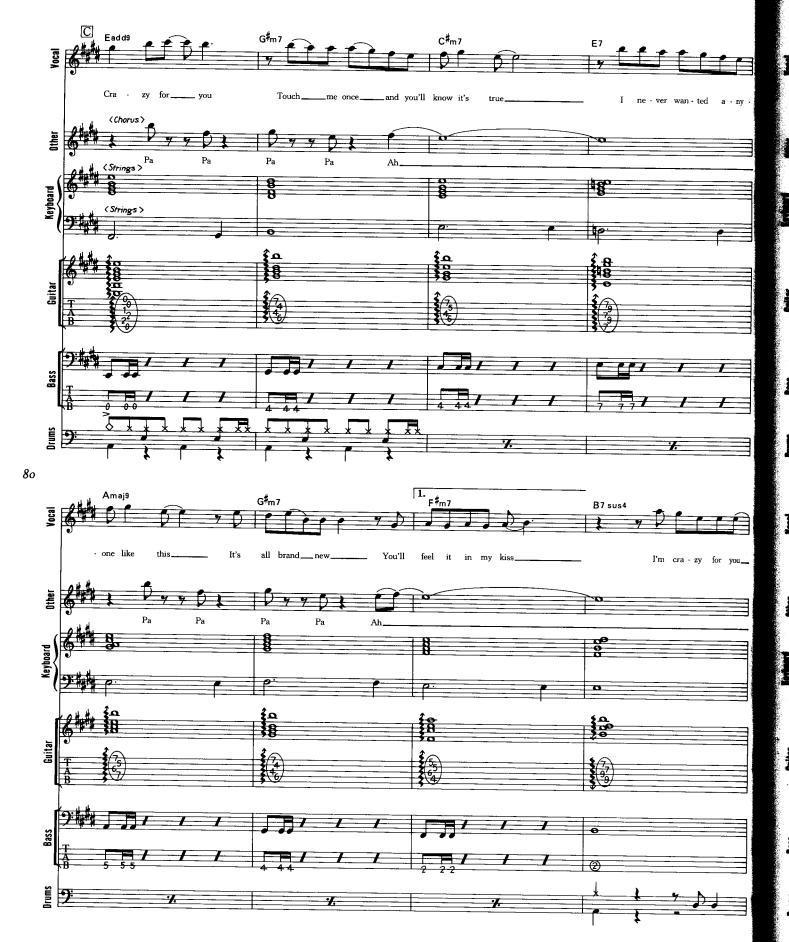


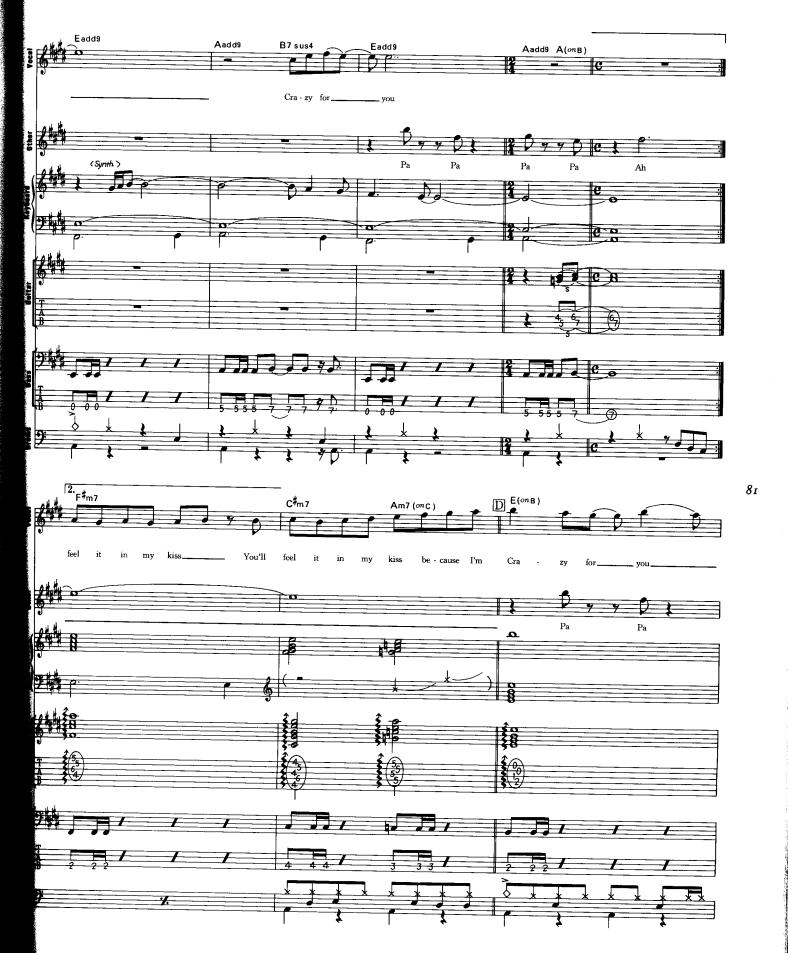






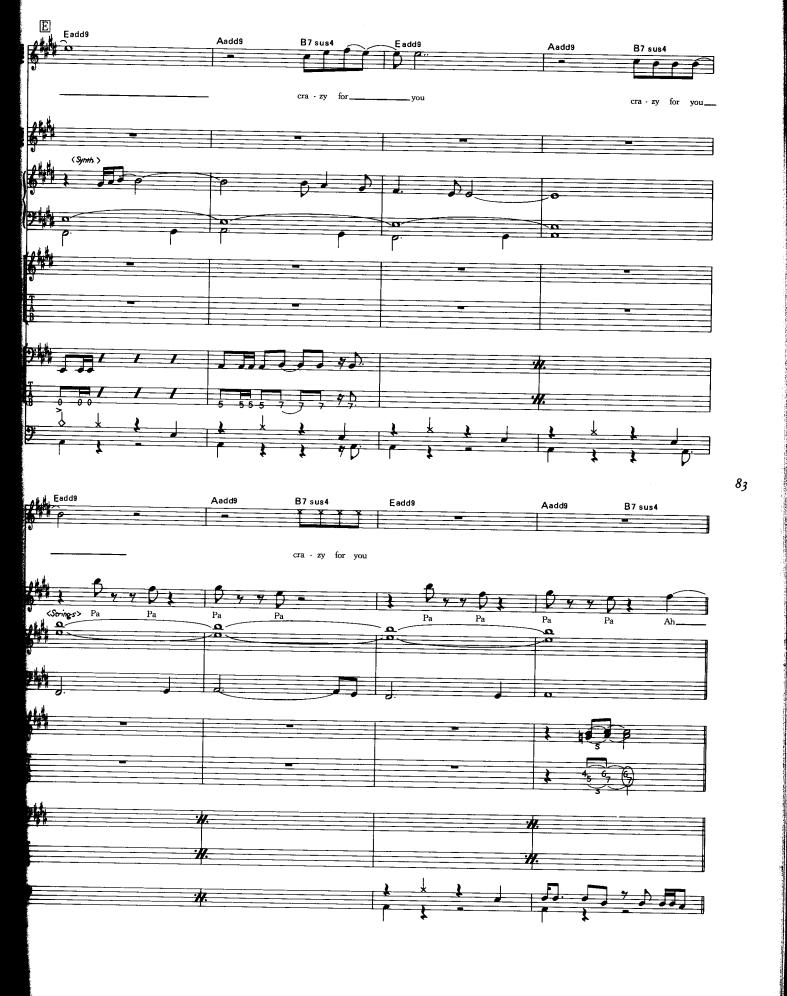


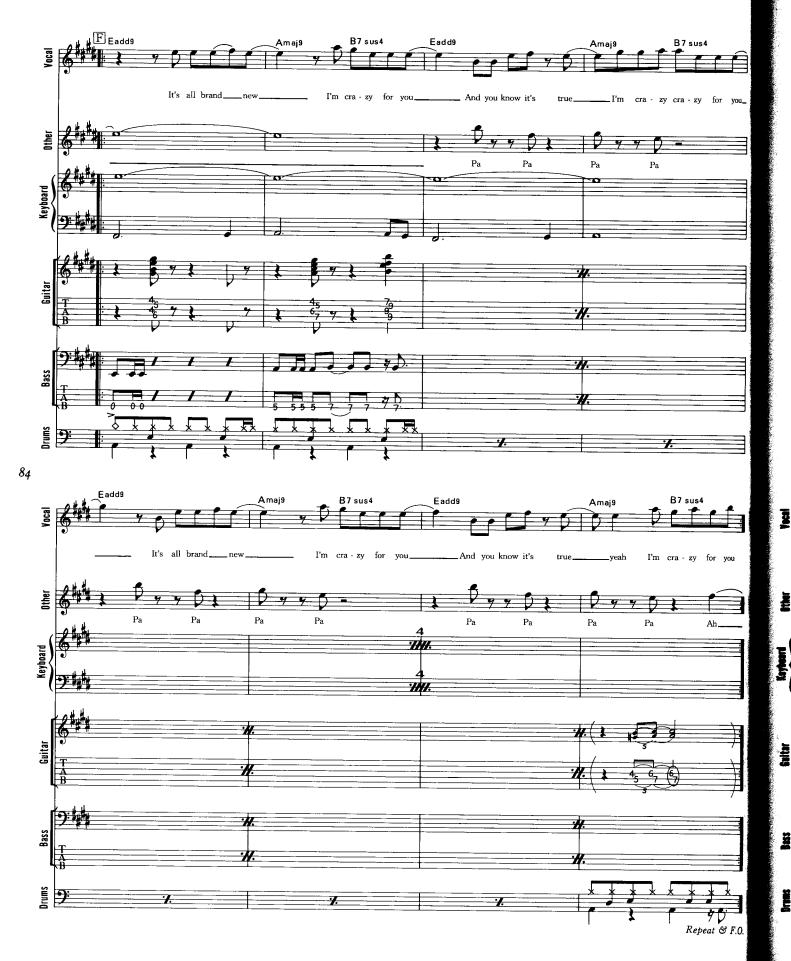














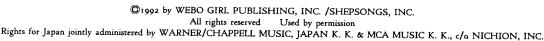
ティーバーセティーバー

Words & Music by Madonna, Shep Pettibone and Tony Shimin

このマドンナの新曲は、ニューヨーク辺りのディスコ・シーンをかなり意識した作りになっている。ベースは従来通りシンセ・ベースなのだが、音程としてはここに記譜したものよりも1オクターヴ低いために重低音の領域に属し、アタック音と倍音成分だけが聴感上音程として聴き取れる程度で、あとは体感するしかない音作りになっている。ベース・ギターで弾くにしても、単調なフレーズの繰り返しのみなので、なるべくシーケンサーを使ってシンセ・ベースを鳴らすようにしたい。楽器の編成自体とパーカッションの多さは以前と変わりないのだが、楽音(音程のある楽器音)が非常に多く同じ場所に重ねられているのが特徴だ。ストリングスは音域的に下から、チェロ、ヴィオラ、ヴァイオリンの3パートに分かれており、ここでは下の2パートを1組(下向きの音符)にして、メロディを担当するヴァイオリンを独立(上向

きの音符)させて記譜した。オルガンと口から出てくるG音のみを 16 分でシーケンスしたエレピは隠し味的に使われており、圧や 旧と区以降のブラスと共にシーケンサーで打ち込んでしまうといいだろう。ドラムスはTR-808 の音とサンプリング音の両方を一緒に混ぜて使っており、ハイハット 2 種類とスネア 3 種類が組み合わされている。キックは 808 で、クラッシュ・シンバルはサンプリングだ。パーカッションもタンバリン、カウベル、カスタネットがシーケンスされているので、オーケストラ・ヒットとスクラッチ・ノイズも含め、大方のものは打ち込んでしまうといい。演奏の醍醐味は、アコースティック・ピアノとガット・ギターだろう。ちなみに、ここでは 2 本にまとめてあるが、ガット・ギターはステレオの [左、中、右] 定位の 3 本が入っている。





































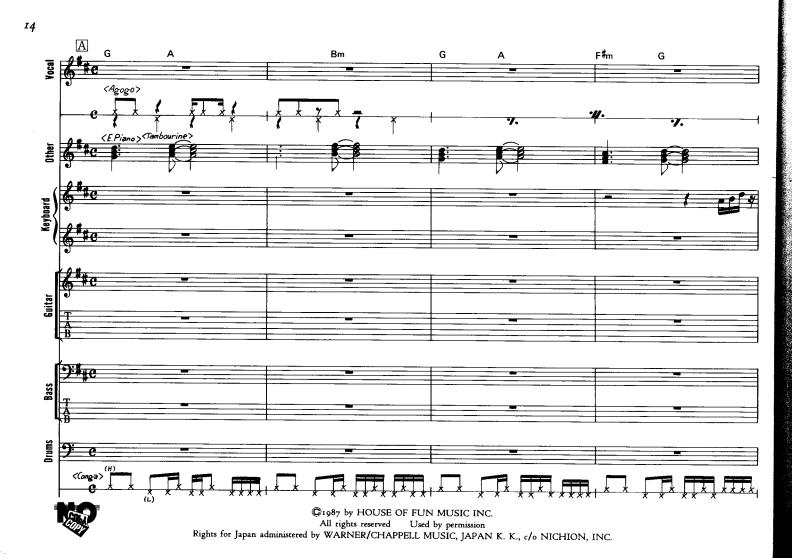
HOLIDAY

ホリティ

Words & Music by Curtis Hudson and Lisa Stevens

大ヒットした軽快なポップス・ナンバー。 II以外は基本的にG-A-Bm-G-A-F#m-Gというコード進行の4小節パターンで曲が進められている事に、まず注目。同じコード進行でも、リハーサル・マークごとに各楽器の演奏内容を変え、それぞれ違った雰囲気を醸し出しているアレンジは何かと参考になる部分が多いだろう。 IDのアタマから登場するエレピは1曲を通してほぼ同じなので、打ち込みを使用しつつバンド演奏する場合は、コンピューターにまかせてしまっても良いだろう。 IDの4小節目から入ってくるシンセは4度和音を利用したフレーズ。このような4度和音を用いたフレーズは、ヘタをすると中華風になってしまうものだが、ここではうまく処理されている。また、5小節目から入ってくるギターは16ビートのカッティング・フレーズ。この場合は4~6弦のミュートが肝。1、3小節目のG、Aコード、4小節

目のGmaj7コードは、セーハした人差し指の先で4弦をミュートするなど、細心の注意を払ってミュートするようにしよう。口からは、先の16ビート・カッティングのギターの他に、単音バッキングのギターが登場する。右腕全体を振れるカッティングに比べ、このような単音フレーズは、どうしてもリズムが甘くなってしまうので注意しよう。旧からはカッティング・ギターのパターンがそれまでとは異なってくるが、ミュートには同様に気を付ける必要があるのは言うまでもない。日はギター、シンセ類のコード楽器がなくなり、リズム楽器のみのパートとなる部分。ここで登場するティンバレスは何はなくとも省けないので、バンドで演奏する場合はドラム・パッドを鳴らすなどして対処するようにしよう。













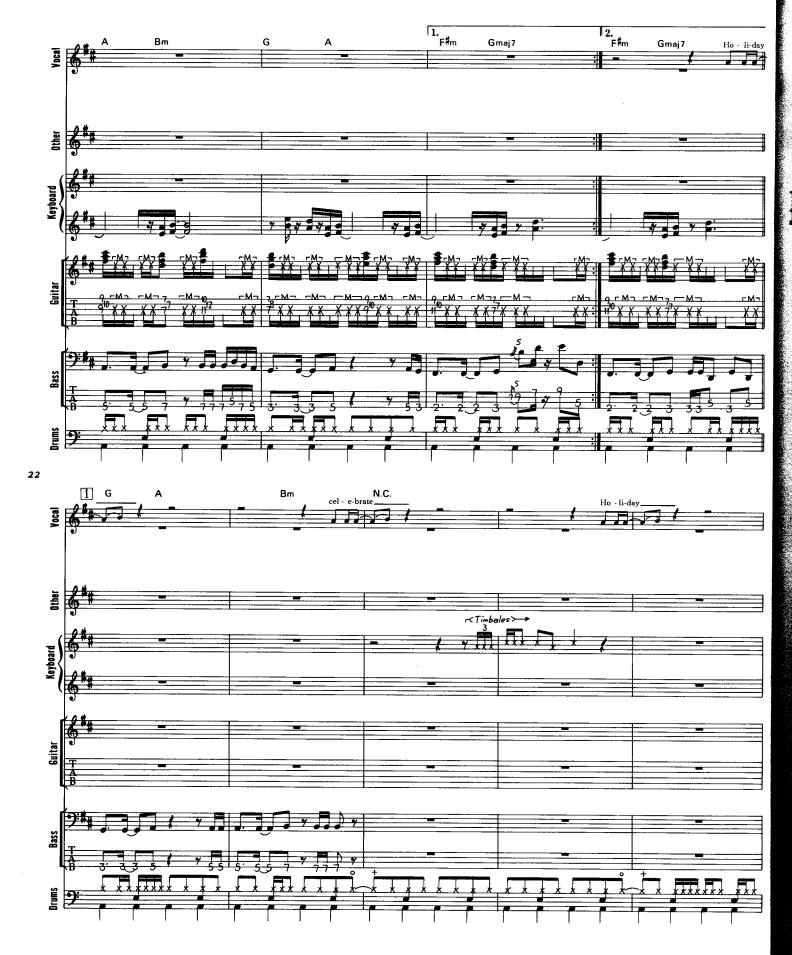
















LA ISLA BONITA

ラ・イスラ・ポニータ〜美しを観

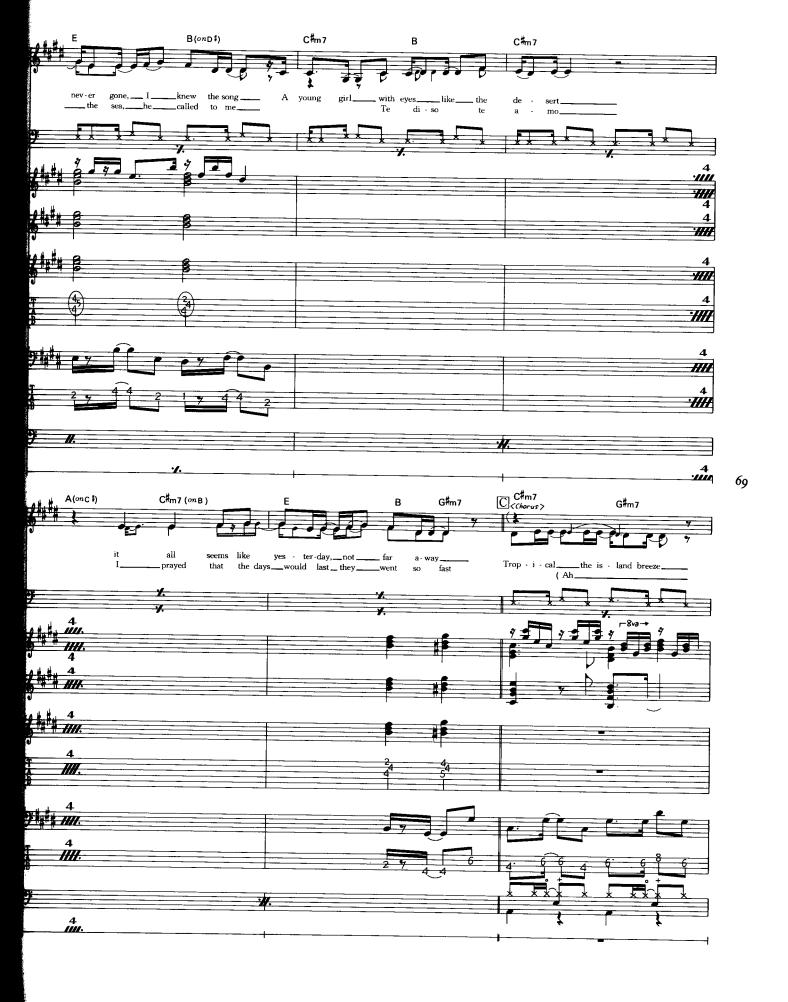
Words & Music by Madonna Ciccone, Pat Leonard and Bruce Gaitsch

南米を思わせるようなエスニックなナンバーだ。やはり内容とアレンジが密着していて、1カッコや2カッコのガット・ギターと、クラベスやカスタネット、ボンゴ、シェイカーといったパーカッションが雰囲気を作っている。シンセ・ベースはここに記譜してある音より、全部1オクターヴ低く弾いている。5弦ベースでもないかぎり低いB音は出せないのでこのように記譜したのだが、オクターヴァーやベース・シンセを駆使してなんとか重低音の世界を作る工夫をしてもらいたい。勿論、5弦ベースのオーナーであれば問題は一挙に解決してしまい、1曲全編を通してまるまる1オクターヴ低く弾けばいいのだ。また、シンセ・ベースをシーケンサーで打ち込む場合も、同様にオクターヴ下げておこう。オーバーハイムのようにソフトな音色のシンセ・ブラス1やオー

ケストラ・ヒットのように派手で分厚いシンセ・ブラス 2、ファルフィッサのようにおもちゃつぽい音色のオルガン、シーケンシャル・サーキットのようにナイーブなストリングスなどがハーモニーを固めているが、この曲のサウンドの中心はシーケンスのシンセ音だ。シンセサイザー・サウンドのことを「ピコピコ・サウンド」と言っていたころのような、安つぽいシーケンス独特のトーンで、それがまたラテン・アメリカの軽さをイメージさせるのにぴったりな音なのだ。コード・トーンからはずれなければ、打ち込みはあまり丁寧に譜面を追わなくてもいいだろう。音程の上下関係とリズム・パターンさえ守れば、大体の雰囲気は作れてしまう。

























LUCKY STAR

ラッキー・スター

Words & Music by Madonna Ciccone

マドンナは、曲のタイトルとサウンド・イメージを一体化させることに関しては、世間一般のアレンジャーのお手本と言える。出だしのシンセサイザーによるシーケンス・フレーズによって、みごとなまでに「煌めく星」のイメージを作り上げている。シンセ・ベースで弾かれたベース・ラインだが、ベース・ギターの4弦を1音下げるだけで全部そのままに弾けるため、この曲に関しては1弦から「G、D、A、D」という変則チューニングで記譜した。従って、4弦を1音下げてD音にした上で、タブ譜の4弦と音との関係については、十分に注意しておいてもらいたい。随所に出てくる「煌めく星」のシンセサイザーと、全体のハーモニーを支える美しいStrings & Brass (ストリングスとブラスを

混ぜたような音)が中心だが、他に4音色ほどシンセ系の音が出てくる。「これこそシンセ・ブラス!」といった感じのSynth. Brass1と、ノイズ成分のたつぷり入ったSynth. Brass2、それとログ・ドラムに近いトーンのSynth. Marimba、そしてサスティンの全くない木琴に近い感じのKarimbaだ。このようにシンセ系が多いために、マドンナにしてはパーカッションがかなり押さえられている。ダビングされたハイハットがダブリングのようにドラムスのハイハットに被り、半ばスネア・ドラムとしてハンド・クラップが使われているだけだ。つまり、ライヴ・ステージに於いて、「どうしても欠かせない音」ではないわけだ。























Em7 Star

Cmaj7

light

D star - bright

light,

13



MATERIAL GIRL

マテリアル・ガール

Words & Music by Peter Brown and Robert Rans

「ライク・ア・ヴァージン」に続いて大ヒットしたポップ・ナンバー。サビの覚えやすいメロディーがとても印象的だ。〇の3声コーラスの1番低いパートは、ヴォーカルのメロディと同じもの。もしコーラス・パートに余裕がないなら、上2段をばっちりキメただけでも〇K! ギターのイントロからのカッティングは、2・4拍目に8分で入るパターン。それぞれの8分の頭を強く、裏を弱く、という感じでプレイするとノリが出るのでキッチリ練習して欲しい。〇からのアルペジオは、右手の腹をブリッジに乗せて

のミュート・プレイ。全てダウン・ピッキングで、音の粒をそろえるよう心掛けたい。また、ミュートをせずディレイやコーラスを用いて広がりのあるアルペジオ・プレイを行うのも、原曲とはまた違う面白いアレンジに仕上がるはずだ。口からのベースは、オクターブの弦跳びプレイ。高い方の音にアクセントを持たせると、心地良いノリが出せるハズ。ドラムは、トップ・シンバルの位置とハイハットのオープン・クローズのパターンを、しっかり把握して練習して欲しい。





























OPEN YOUR HEART

オープン・ユア・ハート

Words & Music by Madonna Ciccone, Gardner Cole and Peter Rafelson

この曲は、ギターとドラムス以外の楽器が全部シーケンサーを使ったものになっている。ベースはシンセ・ベースのフレーズなので、実際にはベース・ギターの4弦解放のE音よりも低い音がかなりたくさん出てくる。ここでは普通のベース・ギターで弾けるようにアレンジレてあるので、シーケンサーやシンセ・ベースでのプレイにする場合は、1曲を通して出てくるE。音やD音を1オクターヴ低くしておこう。ベース・ギターで弾く場合には、4弦を1音下げたりオクターヴァーを使ったり、またはイコライジングを工夫したりして、なるべく重いサウンドになるように心掛けよう。シーケンサーによる16分のハイハットが全編にダビングされているので、ドラムスのハイハット・ワークはかなりバラつ

きがある。リズム・パターンとはとても言えないし、本物と同じに叩くのも至難の技なので、16 ビートのノリを意識してシンバルとスネアを生かすことさえ考えておけば、余裕のある時に軽く入れる程度でいいだろう。ブラス・パートは、サンプリング・ブラスとシンセ・ブラスの2種類が出てくるが、ブラス・アンサンブルとトランペットというように考えてもいいだろう。単音メロディーを弾くシンセサイザー・パートは、ベルつぼいエレピとよくシンセにプリセットされているシタールや、12 弦ギターの音色を混ぜた感じだ。アタックを強くして、サスティンを短くしておき、濃い目にリバーブをかけておけばいいだろう。







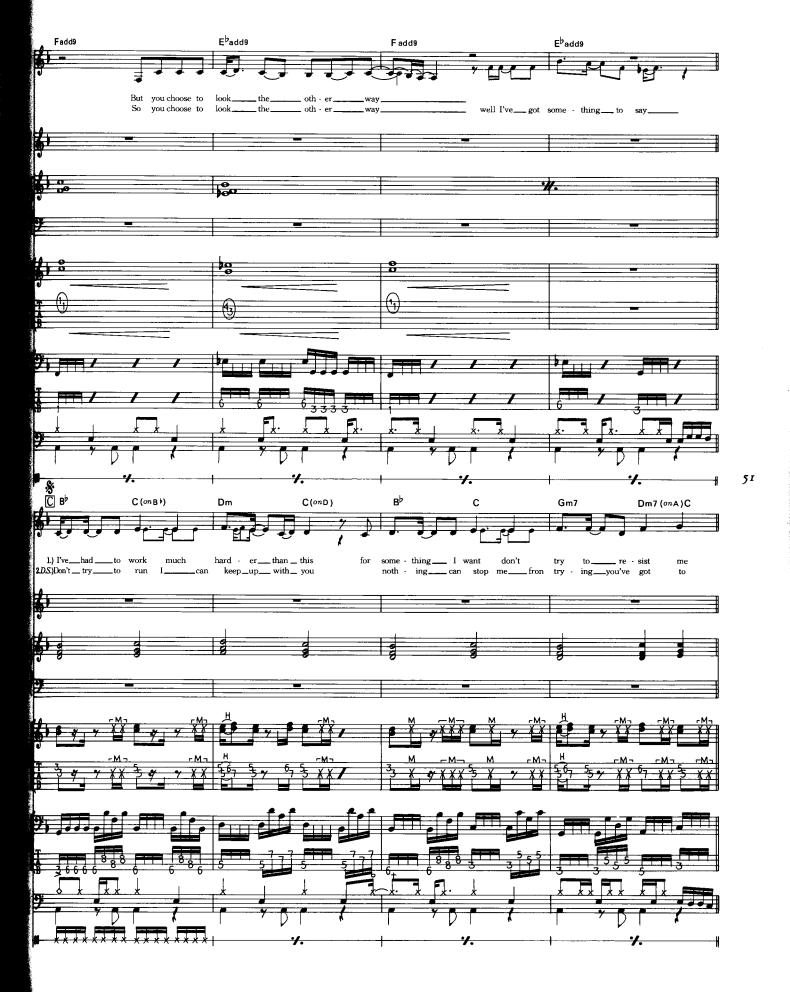
©1986 by BERTUS PUBLISHING/RAFELSON MUSIC/WEBO GIRL PUBLISHING, INC.

All rights reserved Used by permission

Rights for Japan administered by WARNER/CHAPPELL MUSIC, JAPAN K. K., c/o NICHION, INC.







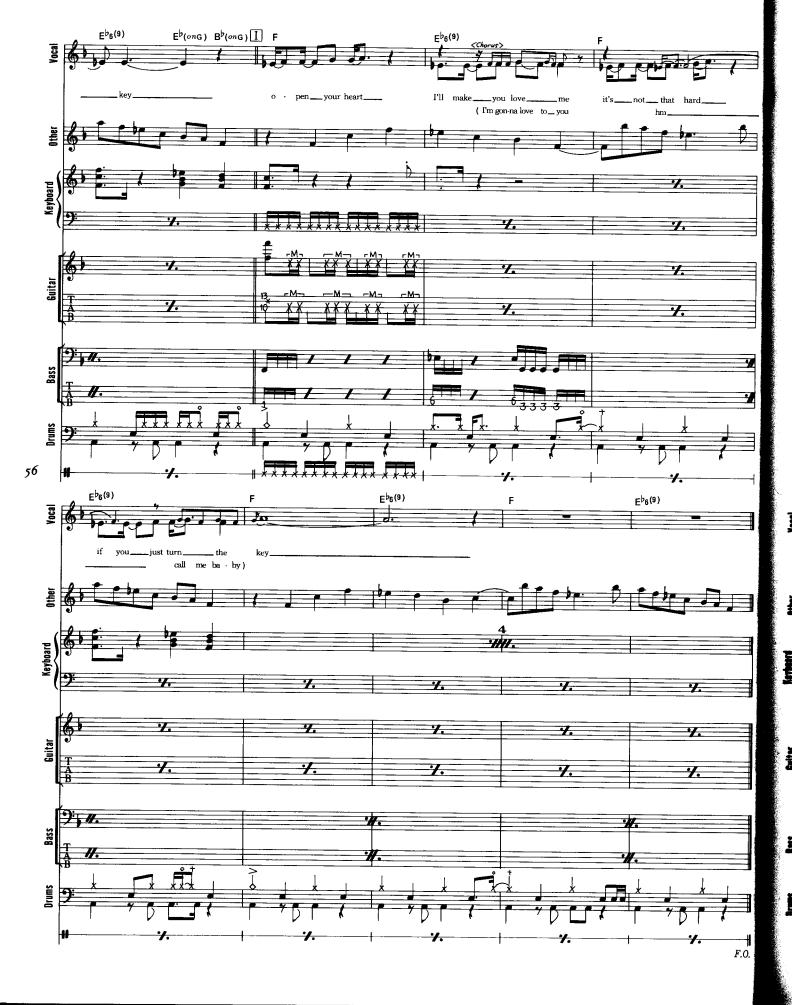












PAPA DON'T PREACH

ババ・ドント・プリーチ

Words & Music by Brian Elliot

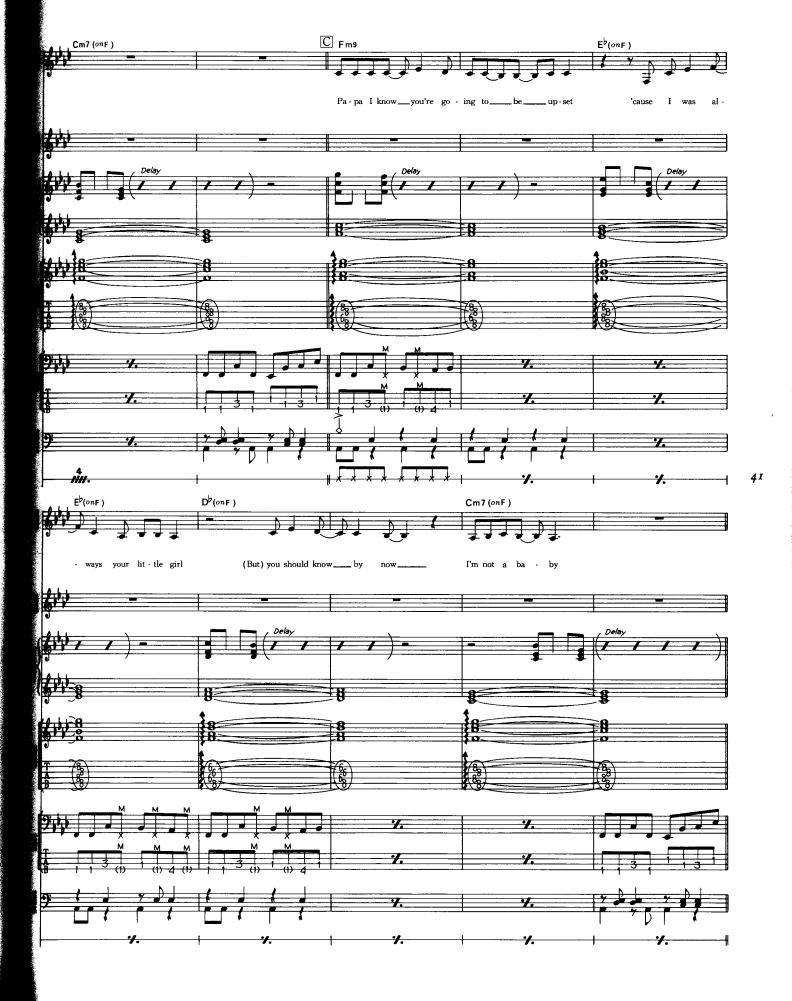
イントロの壮大なオーケストラ・サウンドが印象的なナンバー。
内のシンセ・ストリング 1 がそのパートなのだが、このように広がりのあるサウンドを得るには、音色ももちろんだが、この曲のように通常よりヴォイシングを広くとるのも効果的だ。旧から入ってくるペースは通常の 4 弦ベースよりも低い E 。音がかなり多く登場する。タブ譜には便宜的に 1 オクターブ上のポジションを記したが、できれば 5 弦ベースを使用したり、チューニングを変えるなどして、実音と同じ高さでプレイする方がベターなのは言うまでもない。また、この部分のシンセ・ストリング 1 は 4 分音 情の長さのディレイがかけられている。とは言ってもかけつ放し、というわけではなく、実際にディレイがかかっているのは奇数小節の 2 拍目のみなので、演奏する際にはディレイ・スイッチの細

かいON/OFF作業が必要だ。回のギターの1~5小節目の4拍目 ウラの音は、譜面通りキッチリ弾く必要はない。メインはあくまで各小節の1拍目アタマの音符なので、ダウン・ピッキングのワン・ストロークで"ジャラジャラ~ン"という感じでOKだ。回のギターは実はほとんど聴こえないのだが、ほぼこんな感じだろう。この場合重要なのは音程うんぬんよりもパーカッシブな効果を出す事なので、必要以上に音を伸ばさずにできる限りスタッカート気味に演奏するようにしよう。図はアコースティック・ギターによるギター・ソロ。ソロといってもメロディをなぞっているだけだが、実は1小節の中に100個の音を詰め込むようなプレイよりもこの手のプレイの方が数倍難しい。ピッキングの強弱に気を付け、棒弾きにならないように注意しよう。



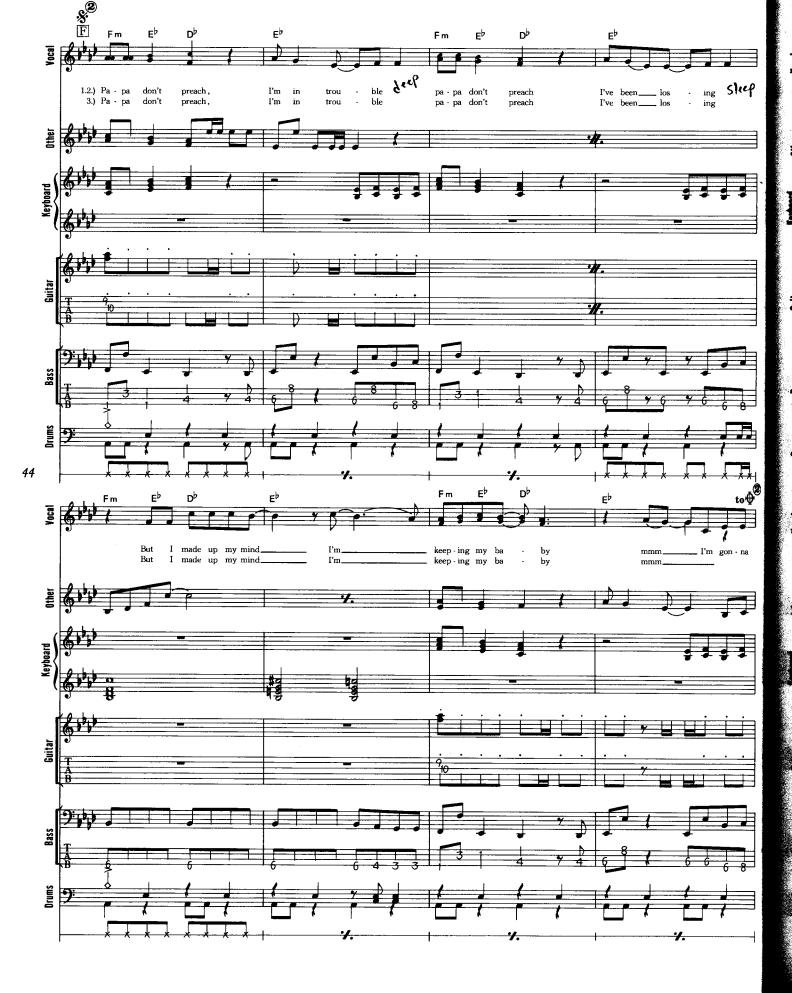


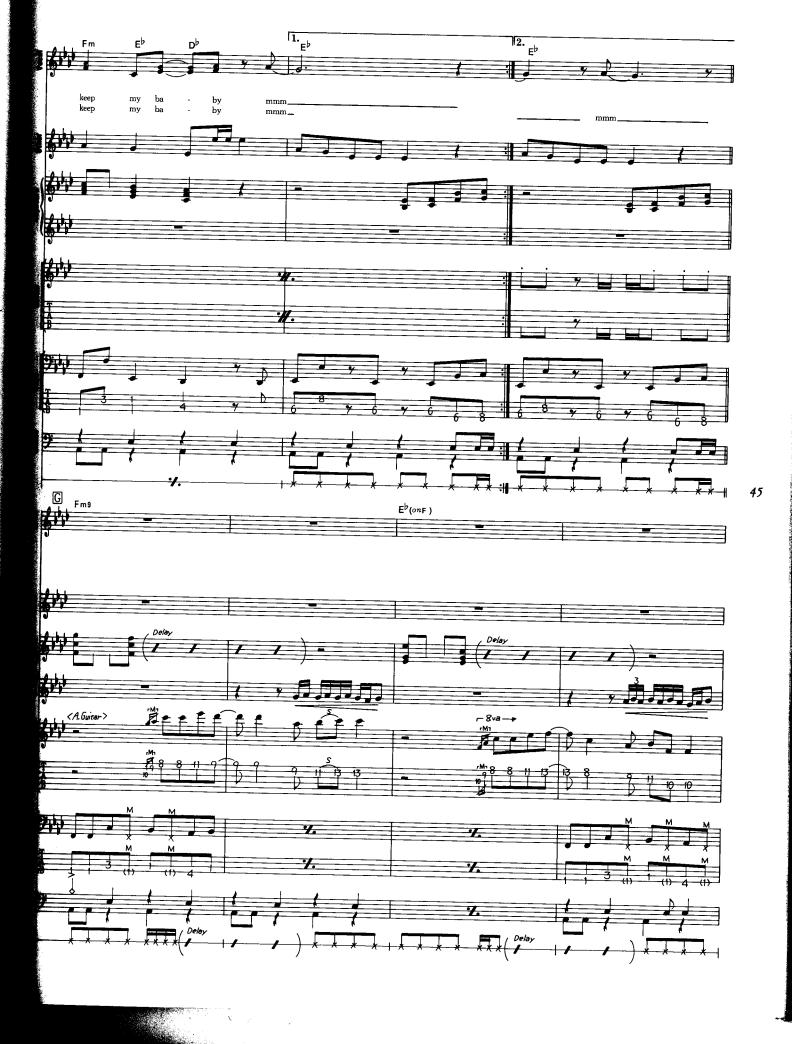
















LIKE A PRAYER

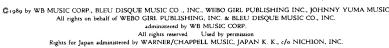
ライク・ア・ブレイヤー

Words & Music by Madonna Ciccone and Patrick Leonard

アメリカの教会の黒人コーラス隊のような、荘厳なゴスペル風コーラスで始まる。題名の通り(Prayer→祈り)教会つぽさを意識したアレンジになっているので、ゴスペル風コーラスの後にはオルガンが登場して凹の本題へと入っていく。この曲のベースもシンセ・ベースなので、ロー(低い)D音や〇音が出てくる。その部分に関してはベース・ギターで弾けるように1オクターヴ高く記譜してあるので、低く重いサウンドになるよう工夫が必要だ。アレンジ上でのキー・ポイントは、トライアングル、カウ・ベル、タンバリン、ボンゴ、コンガで作り出される入り組んだパーカッションのリズム・パターンだ。他の楽器のパターンはシン

プルで繰り返しが多いのだが、一部に出てくるハンド・クラップやティンバレス、シンバル、ビブラスラップも交えてサウンド・イメージとノリを支えているので、シーケンサーとリズム・マシンを駆使して是非とも鳴らしておきたいところだ。また、ハイハットはドラムスとは別録音で、TR-808の音だ。さらに、嵐のようなS. E. やレコードをスクラッチした音のようなホワイト・ノイズもリズミカルに使われている。図の男性の声「year, yoh」とマドンナの声「come on」は、サンプリングしてシーケンサーかキーボードで鳴らしたものだ。手軽なサンプラーでいいからしっかりとサンプルを録って、確実に決めておきたいものだ。









e dine

3

į

Suitar

K

Ĭ





























TRUE BLUE

トゥルー・ブルー

Words & Music by Madonna Ciccone and Steve Bray

ないとなくカーペンターズ風な、実にアメリカン・ポップスの 典型と言いたくなるようなナンバーだ。ノリはシャッフルなのだ が、全体的に3連符を刻んでいるところが多いので、8分の12拍 子で記譜した。通常の1拍が付点4分音符になっているので、気 を付けておこう。当然、2拍の音符は付点2分になり、体符も同 様なルールで付点が付くので注意して欲しい。シンセ・ベースは このままのオクターヴで弾いているのだが、囚のパートにだけ左 チャンネル側に帰ってくるディレイがかかっているので、8分音 精分(3連の)のタイムにディレイを設定しておこう。この曲は マドンナの他のナンバーとはちよっと趣を異にしており、楽音(音 程のしっかりしたメロディーやコード用の音)中心でパーカッションはハンド・クラップのみになっている。エレクトリック・ピ アノはコーラスのかかった模擬アコピのような音(シンセサイザーで作ったアコピのような音)が囚、匠、囚、田、囚に入っていて、その他の部分(3連符を刻んでいる部分)はアタッキーなハイトーンのブラス音を混ぜたエレピの音色になっている。クラヴィネットもシンセっぱい音色で、軽いタッチで入っている。ストリングスはこの曲のメイン楽器なので、是非ともサンプリング音源を使っておきたいところだ。シンセ・ストリングスはこの「生ストリングス」に対峙するように使われているので、両者の音色の差がなんとしても欲しいわけだ。また、ウォームなアメリカン・サウンドに仕上げるために、グロッケンが欠かせない要素となっている。木製楽器の音がエスニックなのに対して、金属楽器の音は白人文化的雰囲気を出すと言えるだろう。



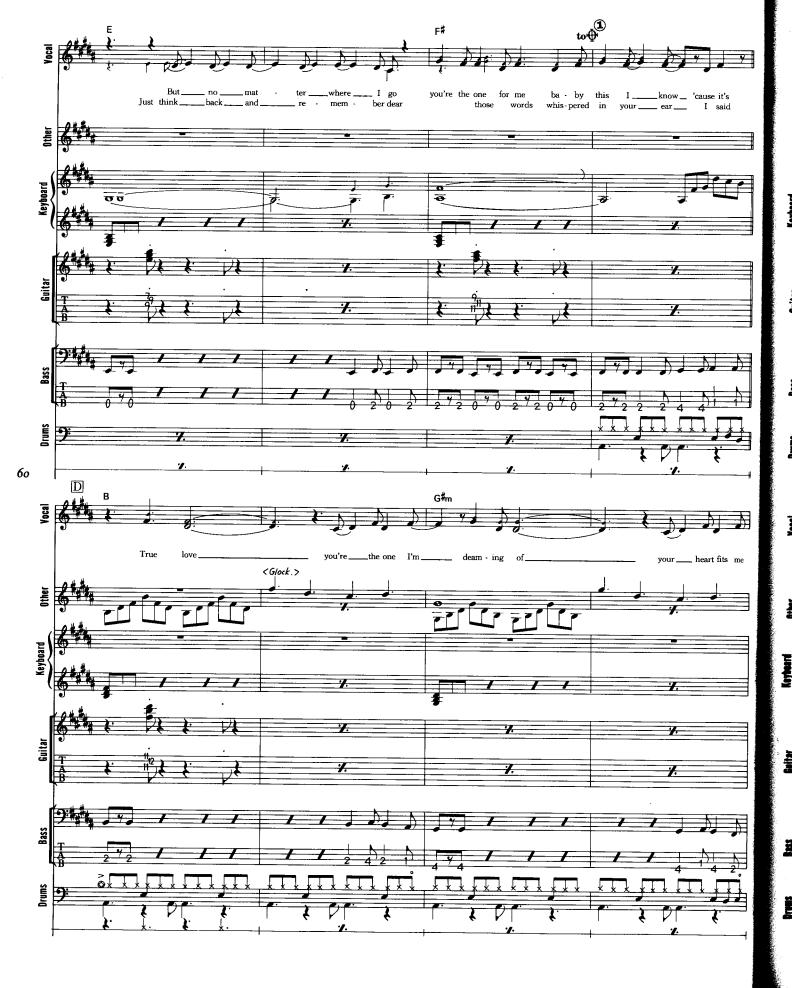
















-

Cuity

BK

See L

ة











LIKE A VIRGIN

ライケ・ア・ヴァーシン

Words & Music by Thomas Kelly and Billy Steinberg

世界的な大ヒットにより、女性ロック・ヴォーカリストとして確固たる地位を築き上げたMADONNAの記念すべきナンバー。ヴォーカルのkeyは、日本人でもラクにカバーできる範囲なので特に問題はない。MADONNAの細かい歌いまわしやアドリブから、感情表現の方法を自分なりに研究してみるといいだろう。ギターのイントロからのカッティングは全てダウン・ストロークで、その直後右手の腹を弦の上に乗せミュートする。譜面上では8分音符で記してあるが、実際には少しスタッカート気味にプレイしたほうがいいだろう。シャープな演奏を心掛けて欲しい。口から

は、右手の腹をブリッジ付近に置いてのミュート・プレイ。クリアー・トーンのエレキ・ギターなので、ミュートをし過ぎると音が前に出てこない場合があるので要注意。ブリッジから 1~2 CMネック側に右手を乗せ、それ以上ネック寄りに行かないようにするといいだろう。シンセ・ベースによるものと思われるが、エレキ・ベースで弾けるようタブ譜を付けておいた。8分音符主体のフレーズが続くが、音の粒をそろえるため全てダウン・ピッキングでプレイしよう。

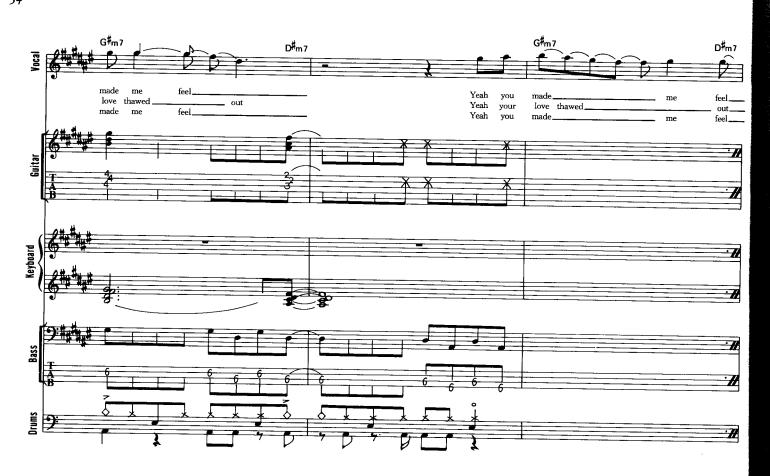














c♯ <u>¥</u>

Hey

Like Like

a a a

C[#]add9



C[#]sus4

new _ cold _

and

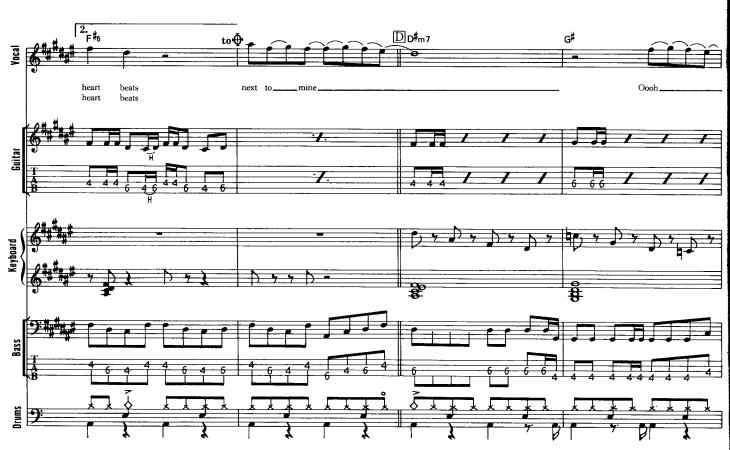
and hide_

D#m7

Shin - y

What was scared and
I've no - thing to















VOGUE

ヴォーグ

Words & Music by Madonna Ciccone and Shep Pattibone

典型的なハウス・ナンバー。恐らくヴォーカル以外の楽器は全て打ち込みだろう。この曲も通常のエレキ・ベースでは出し得ない音域が数多く出てくるのだが、4弦のみをE。に落とした変則チューニングだと実音と同じ音域で無理なくプレイできると思われるので、タブ譜はこの変則チューニングを前提に記してある。 四のシンセ・ストリングスはオープン・ヴォイシングを使用し、少ない音数ながらも十分な広がりを醸し出している。 ただトップの A 音のみ、どうも違った音色に聴こえるので、この音のみ別の楽器が使われている可能性もある。 凹からはドラムが入ってくるが、わざと初期のリズム・マシンのようなチーブな音が使われているため、キックがほとんど聴こえなくなっている。 とりあえず、人間が叩く場合は 2 拍目ウラのスネアを弱めに、 3 拍目ウラのハイハットを強めに叩けば似てくるだろう。また、2 カッコ内のフレ

ーズは人間が叩く場合、ハイハットを省いた方が自然だろう。© のシンセ1の2小節パターンは16分音符の長さのディレイがかけられている。実際に弾いているのは恐らく最初の音のみだろう。旧のシンセ・ストリングス、シンセ1は□と同様のフレーズのため譜面上はkey A,として記したが、この部分から登場するピアノのフレーズを見るとKey G#mに転調している、と考えた方が良いかも。譜面上に臨時記号が数多く登場しているので、読み間違えをしないように。なお、譜面には記していないが、余裕があれば左手でベースとユニゾンのラインをフォローしてみると良いだろう。□、□のヴォーカルはラップ。田国語でない英語をこのようにリズミックに"しゃべる"のはかなり大変だろうが、頑張ってトライしてみて欲しい。

I I 4









































WHO'S THAT GIRL

フーズ・ザット・ガール

Words & Music by Madonna Ciccone and Patrick Leonard

同名映画の主題歌ともなった曲。映画の方の評判はともかく、この曲自体はヒット・ナンバーとなった。 図のベースとクラビネットのパターンは休符が決め手。この場合、必要以上に音を伸ばしてしまうとノリが損なわれてしまうので注意しよう。また、このパターン、一見2小節単位のようだが、奇数小節の4拍目が異なっているので注意。なお、キーボードでこのようなフレーズを費く場合、ダウン、アップ・ピッキングのあるギターに比べ、どうしてもノリを出しにくい。常日ごろの鍛練がモノをいうフレーズだ。この部分のドラムはハイハットを叩かず、シェイカーがハイハットの代役を果たしている。バンドで演奏する際に、シェイカーが入れられない場合はハイハットを16分で叩くようにしよう。5小節目から入ってくるギターは4~6弦のミュートに注意。

このパターンだと、全てのコードにおいて人差し指で1~3弦をセーハし、人差し指の先を4弦に当ててミュートしておくのが得策だろう。また、GコードからCコード、G/BコードからAmコードの変わり目がギターのみ"くつて"いる事に注目。比較的最近のダンス・ミュージックには、このようなアレンジが施してあるものが多いようだ。旧、口はベースの譜割が、それまでに比べてかなりゆったりしたものになるが、依然休符に神経を使わなければいけない事は言うまでもない。旧のティンバレスは重要なパートなので、省かずにドラム・パッドを使うなどして対処したい。旧もこのテの音楽にはしばしば用いられるアレンジだ。ギターとシンセが全くユニゾンとなるため、今まで以上に各パートの息を合わせる必要がある。





85







Keybearl

Guitar

2

Brune

1

_

E

-

•



8.



